

編集後記

今回、郷土誌の編集を終えて痛感したことは、歴史を綴ることの大変さとむずかしさでありました。これは編集委員全員の共通した思いであり、ときに苦勞した日々が想い起こされます。

編集の仕事は、まず編集委員を数グループに分け、各グループごとの担当分野を決めて資料集めから始まりました。資料収集の基本はなんといても足と耳で稼ぐことですが、この鉄則に従って各編集委員が活発に活動しました。各自の家に残る古い資料を探す一方、人見の各家を回って協力をお願いいたしました。この要請に心よく応えていただき、資料提供や取材にご協力いただいた各家庭に、ここに改めてお礼を申しあげ次第であります。なお、紙面の都合によって割愛させていただいた資料や写真も沢山あります。編集上の制約や事情をご理解いただき、お赦しいただきたいと思えます。心よりお詫び申し上げます。

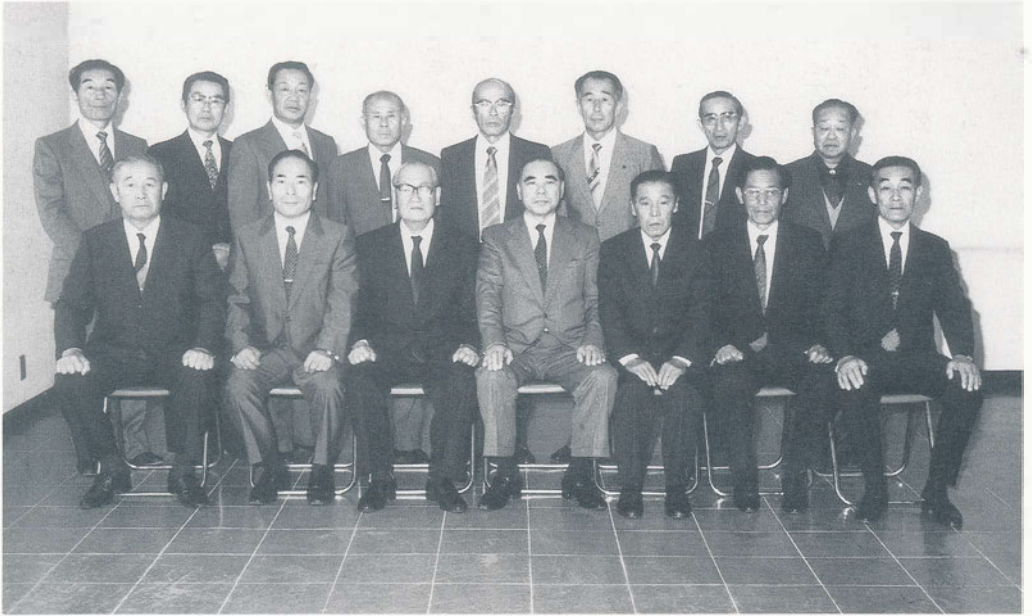
人見の歴史を綴るうえで、もっとも困ったのは、やはり古い記録や資料が乏しいという悩みでした。このため、編集を終えて今なお一抹の不安があります。力不足というべきでしょう。したがって、いつかこれをさらに補完していただくよ

う後世に期待したいものです。

資料収集が終わると直ちに執筆活動が開始されました。おそらく大半の人が書くことのむずかしさを痛感し、ねじり鉢巻で机に向ったものと思われれます。資料の読みとり、文章の構成、句読点など、日ごろこうした経験のない人も多く、その苦勞は筆舌に尽くせぬものがあつたことでしょう。文章の行間に溢れる苦節を読みとっていただければ幸いです。

それだけに完成した原稿を持ち寄つたときの、各編集委員の満足した表情はきわめて印象的でした。まさに大事業をなしたとげたときの充実感のようなものがあり、故郷の歴史を残すことへの意欲と執念が感じられました。きわめて画期的な挑戦であり、努力であつたといつてもけつして過言でないと思えます。

人見の歴史を創り、築きあげてきたわれわれの先祖。なかでも近江屋甚兵衛翁の勧めに応じて、東京湾岸で初めて海苔養殖に成功した先人たちの努力とパイオニア精神は、まさにわが郷土の誇りであります。これらを顕彰し、後世に残すことができれば、この郷土誌もその使命の一端を果たすことができるのではないかと考えます。多くの文献や書籍も参考にさせていただきました。ここに改めて謝意を申しあげさせていただきます。また、編集に関連して監修の重要な役割と、編集上の技術的な指導をいただいた菱田忠義・東協正義両先



前列左より 石井正次、守久治、菱田忠義、守清次郎、高橋敏男、高橋秋蔵、斎藤茂、後列左より 守正義、秋元康太郎、宮崎要策、守義雄、白井吉男、宮崎喜久雄、小松喜一、鈴木明の編集委員各氏

▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	
鈴木	小松	斎藤	宮崎	宮崎	守	守	高橋	白井	石井	秋元	守久	高橋	守
明	喜一	茂	要策	喜久雄	正義	義雄	秋蔵	吉男	正次	康太郎	久治	敏男	清次郎

【編集委員】

生ならびに関係各位に心からお礼を申しあげます。
 変転きわまらない激動社会のなかで、この郷土誌がわが故郷の一つの指標になることを祈って編集後記とします。



人見郷土誌編集委員会委員写真

燦
人見郷土誌

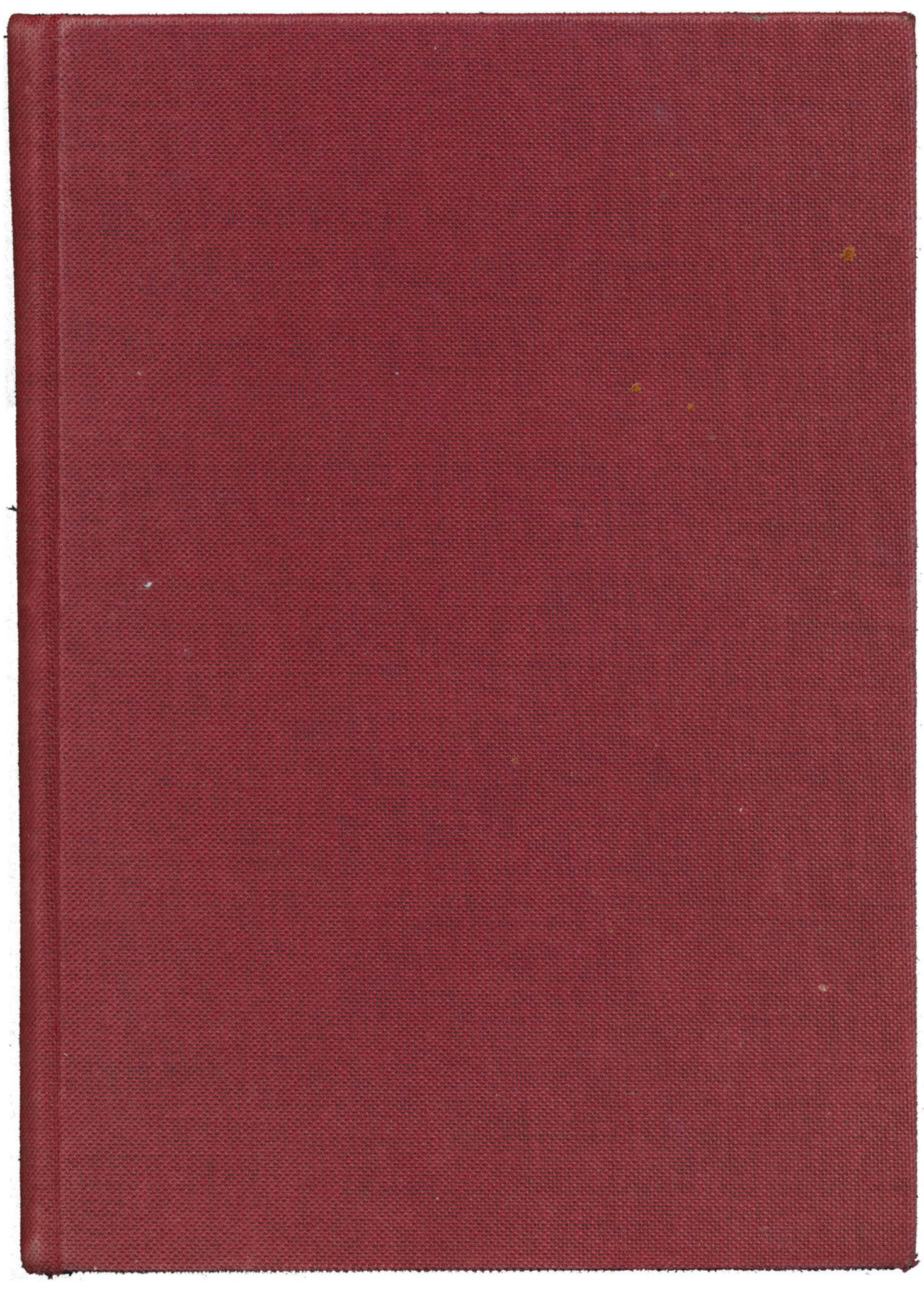
平成三年三月発行

編集
人見土地区画整理組合
郷土誌編集委員会

発行
人見土地区画整理組合

印刷
ワタナベ印刷株式会社

昭和二十九年三月発行
昭和三十三年三月発行
昭和三十七年三月発行
昭和四十一年三月発行
昭和四十五年三月発行
昭和四十九年三月発行
昭和五十三年三月発行
昭和五十七年三月発行
昭和六十一年三月発行
昭和六十五年三月発行
昭和六十九年三月発行
昭和七十三年三月発行
昭和七十七年三月発行
昭和八十一年三月発行
昭和八十五年三月発行
昭和八十九年三月発行
昭和九十三年三月発行
昭和九十七年三月発行
昭和一百零一年三月発行
昭和一百零五年三月発行
昭和一百零九年三月発行
昭和一百一十三年三月発行
昭和一百一十七年三月発行
昭和一百二十一年三月発行
昭和一百二十五年三月発行
昭和一百二十九年三月発行
昭和一百三十三年三月発行
昭和一百三十七年三月発行
昭和一百四十一年三月発行
昭和一百四十五年三月発行
昭和一百四十九年三月発行
昭和一百五十三年三月発行
昭和一百五十七年三月発行
昭和一百六十一年三月発行
昭和一百六十五年三月発行
昭和一百六十九年三月発行
昭和一百七十年三月発行



卷之二

人

之

理

一

論